

専門領域別研究発表 | 専門領域別：保健

■ 2023年9月1日(金) 14:00 ~ 15:03 | ㊦ RY305 良心館3階 R Y 3 0 5 番教室

■ 保健／口頭発表①

座長：久保 元芳（宇都宮大学）、物部 博文（横浜国立大学）

14:00 ~ 14:15

[10保-口-01] 教員養成系学部1年生が保持する心肺蘇生にかかわる素朴概念の事例

もう一度！「保健」で心肺蘇生・AED教育をしっかりと！！

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

14:16 ~ 14:31

[10保-口-02] 家庭において子供と性に関するコミュニケーションをとる際の母親の意識

*宮地 美帆¹、小出 真奈美^{2,1}、木塚 宙敬¹、戸村 貴史¹、古田 映布¹、泉 彩夏^{3,1}、片岡 千恵⁴、佐藤 貴弘⁴ (1. 筑波大学人間総合科学学術院、2. 流通経済大学、3. 鳴門教育大学、4. 筑波大学)

14:32 ~ 14:47

[10保-口-03] 女子大学生の健康意識及び食習慣に与えたコロナ禍の影響について

*銭谷 初穂¹、白川 哉子² (1. 国際武道大学、2. 昭和女子大学)

14:48 ~ 15:03

[10保-口-04] 座位姿勢の身体的・精神的負荷の調査

子どもが取り得る座位姿勢に着目して

*増田 一太¹、塩澤 成弘²、大友 智² (1. 国際医学技術専門学校、2. 立命館大学大学院)

保健／口頭発表①

座長：久保 元芳（宇都宮大学）、物部 博文（横浜国立大学）

2023年9月1日(金) 14:00 ～ 15:03 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

14:00 ～ 14:15

[10保-口-01]教員養成系学部1年生が保持する心肺蘇生にかかわる素朴概念の事例

もう一度！「保健」で心肺蘇生・AED教育をしっかりと！！

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

素朴概念とは、子どもたちが学校教育において学習する前に身に着けている知識で、通常の大人や科学の立場からみれば正しくないとみなされる概念を指して命名された。教育心理学や認知心理学、理科教育学の分野においては、前概念（preconception）、代替概念（alternative conception）、現象学的原理（phenomenological conception）、ル・バーなどが使用されており、その呼び方は20種類以上にも達する。ヴィゴツキーの「生活的概念」にも近く、近年では保健科教育の分野でも研究がされはじめている。

素朴概念の存在は、子どもの科学的認識形成の中核的概念といわれ、診断的評価の対象となる。そこで得られた診断的評価の情報をもとに、発問や探究課題が工夫されたり、「つまずき」が組み込まれたりして授業は構成される。森昭三も、保健の授業・教材づくり研究を進める上で「対象とする子どもを把握する」重要性を挙げ、「教科の内容は、子どもの発達に即して体系づけられると同時に、逆にその内容の体系が子どもの発達を促進していくものでなければならない。つまり、ここではヴィゴツキーのいう『発達の最近接領域』が問題とされる」（体育科教育,1975）と主張し、「生活的概念」と「科学的概念」の複雑な相互作用を生じさせる「発達の最近接領域」の研究の必要性について言及している。

本研究では、全ての保健学習事項が修了した国立大学法人の教員養成系学部1年生を対象に、研究利用に同意が得られた198名の回答を分析した。その結果、胸骨圧迫の位置は66%、心臓の位置は31%、AEDの理解は22%の正答率であった。保健科では、子どもたちが保持する素朴概念を考慮した上での心肺蘇生やAED指導法の検討とともに、教員研修や教員養成課程では素朴概念の存在を理解した教科教育法の工夫と改善が求められる。

保健／口頭発表①

座長：久保 元芳（宇都宮大学）、物部 博文（横浜国立大学）

2023年9月1日(金) 14:00 ～ 15:03 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

14:16 ～ 14:31

[10保-口-02]家庭において子供と性に関するコミュニケーションをとる際の 母親の意識

*宮地 美帆¹、小出 真奈美^{2,1}、木塚 宙敬¹、戸村 貴史¹、古田 映布¹、泉 彩夏^{3,1}、片岡 千恵⁴、佐藤 貴弘⁴ (1. 筑波大学人間総合科学学術院、2. 流通経済大学、3. 鳴門教育大学、4. 筑波大学)

現在、性に関する教育は国際セクシャリティ教育ガイダンスに基づいた包括的な教育が求められてきている。包括的な性に関する教育は学校が中心的な役割を果たすといわれているが、学校のみならず家庭における役割も重要であり学校と家庭の連携が一層求められている。また、家庭での親子のコミュニケーションは子供の性に関する学習体験に大きな影響を及ぼすことが指摘されている。学校と家庭で学習する内容のギャップを埋めることが包括的な性に関する教育を進めていく上で重要であるが、保護者を対象とした性に関する教育についての研究は十分に蓄積されていない。そこで本研究は、小学生の子供を持つ母親を対象として家庭で子供と性に関するコミュニケーションをとる際の意識について検討することを目的とした。なお、本研究は個人の子育てに関する認識や行動を理解するための理論的枠組みとして Parent Development Theory (PDT) を用いた。本調査は、小学生の子供を持つ母親6名を対象としてオンラインによる半構造化面接法を用いて実施した。主な質問項目は、学校における性に関する教育の内容および子供の学びについて、家庭での性に関するコミュニケーションについて、である。収集したデータは継続的比較分析法を用いて分析した。その結果「自己防衛行動を教えることの重要性」、「性に関して大切な話をする適切なタイミング」、「学校と家庭での性に関する教育の内容」の3つの主要なテーマが生成された。母親は、子供と性に関するコミュニケーションをとる際に様々な困難を経験しており、これらには母親が持つ性に関する価値観や知識不足、日本の子育てに関する特徴などが要因として存在することが考えられた。これらの結果から包括的な性に関する教育の充実に向けて、学校を中心として家庭での性に関するコミュニケーションの強化を促すことが重要であると考えられた。

保健／口頭発表①

座長：久保 元芳（宇都宮大学）、物部 博文（横浜国立大学）

2023年9月1日(金) 14:00 ～ 15:03 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

14:32 ～ 14:47

[10保-口-03]女子大学生の健康意識及び食習慣に与えたコロナ禍の影響について

*銭谷 初穂¹、白川 哉子² (1. 国際武道大学、2. 昭和女子大学)

【背景】2020年度～2022年度の新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、大学でも多くの変化を余儀なくされた。この変化により、学生は大学へ登校しない、座位時間が長くなる等、これまでとは異なる学生生活を送ることとなった。現在はコロナ禍以前の状態を取り戻しつつあるが、コロナ禍が学生の健康意識や食習慣に大きな影響を与えたと推察される。【目的】コロナ禍での生活が学生の健康や食習慣に与えた影響を把握し、学生生活支援や健康教育の一助となる基礎資料を得ることを目的とした。【方法】調査期間は、①対面授業が一部再開した2021年10月、②対面授業が完全再開した2023年5月であった。S女子大学に所属し、対面授業を受講している学生1年次～4年次の女子学生133名（2021年10月）および100名（2023年5月）の学生を対象とした。調査は、WEBアンケート調査および簡易型自記式食事歴法（BDHQ）を用いた食事調査を実施した。なお、本調査は、昭和女子大学倫理委員会の承認を得て行われた。【結果・考察】コロナ禍で健康意識や健康的な食生活への意識が高まり、現在もその傾向が継続していることが示された。しかし、コロナ禍を経て、運動不足であると感じている者や体力について不安を感じている者の割合が高い傾向であった。さらに、食習慣においても、欠食の割合増加といった食生活の乱れは示唆されなかったものの、脂質が多く栄養に偏りがある食事内容になっている可能性があることが示唆された。注視する点として、健康や食事に関する知識をインターネットから入手する機会が多いことが示されたが、根拠が不明確な情報が流布していることも考えられるため、適切な知識を取得できていない可能性が懸念される。運動や食事に関する健康教育の実施や大学からの適切な情報提供を行うことが、コロナ禍を経た学生への健康的な生活の形成の一助になると考える。

保健／口頭発表①

座長：久保 元芳（宇都宮大学）、物部 博文（横浜国立大学）

2023年9月1日(金) 14:00 ～ 15:03 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

14:48 ～ 15:03

[10保-口-04]座位姿勢の身体的・精神的負荷の調査

子どもが取り得る座位姿勢に着目して

*増田 一太¹、塩澤 成弘²、大友 智² (1. 国際医学技術専門学校、2. 立命館大学大学院)

現在、子どもの腰痛の有病率は、成人期と同等であり、座位時に腰痛を訴える場合が多い。特に近年、子どもの体育座りに伴う腰痛が注目され、学校での体育座りを見直す機運が社会的に高まっているが、座位時に腰痛を訴える姿勢は体育座りだけではない。そこで、本研究の目的は、子どもが教育現場で実施することの多い、椅座位、胡坐、立て膝、体育座りに伴う身体的・精神的負荷の影響について調査することとした。対象は、側弯症や脊椎分離症の既往を含む腰痛のない18歳から20歳の医療系専門学生96名（男性61名、女性35名）（平均年齢18.5±0.5歳）とした。調査は、椅座位（n=95）、胡坐（n=93）、立て膝（n=96）、体育座り（n=92）の4種類の座位法を20分間行い、その間に生じる自覚的な身体及び精神的な負荷の種類と程度を調査した。結果は、体育座りが精神的負荷指数や実験を最後まで実施できなかったリタイア率が最も高い姿勢であった。立て膝は、他の姿勢との有意差はなかったものの、身体症状が出現する部位や種類が他の姿勢に比べ多彩であった。特に下枝の痺れの多さは、他の姿勢にない特徴であった。この原因は、同姿勢が左右非対称的な姿勢であるため、一側臀部に負荷が集中したことにより坐骨神経症状が引き起こされたものと考えた。椅座位は、身体的または精神的負荷指数、リタイア率が最も低く、他の姿勢と比べ安楽姿勢であることが示唆された。一方、胡坐の精神的負荷指数やリタイア率は、椅座位に近似しており、床での座位姿勢の中で最も身体的・精神的負荷の少ない姿勢であることが分かった。これらより、体育座りは、学校生活の中で取り得る姿勢の中で身体的・精神的負荷の高い傾向がある姿勢であることが分かった。